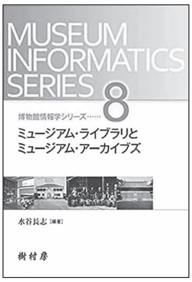
書評

水谷長志 編著
博物館情報学シリーズ8『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』

Takeshi Mizutani,
“Museum Informatics Series 8,
Myujiamu raiburari to myujiamu akaibuzu”



樹村房/2023年４月/
四六判/301頁/
定価 2,100円＋税

湯地　ふたば
Futaba Yuji

1　はじめに

本書が収録される樹村房「博物館情報学シリーズ」（全８巻）は、情報革命によって「情報提供のシステム」へと進化している博物館[1]における情報への取り組みをテーマ別に編纂したシリーズである。このシリーズの最終巻となる本書『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』では、博物館（M）と図書館（L）、文書館（A）との連携がテーマとして取り上げられている。博物館では、情報学および方法論の知識が蓄積されていないことが課題とされており、このMLA連携により、博物館が情報面からどのように捉えられるかを探求し、さらに新たな学問としての体系が生まれてくることが期待されている[2]。

本書では東京国立近代美術館、大阪中之島美術館、東京国立博物館といった日本の主要な美術館・博物館を事例として取り上げ、９人の執筆者が、各館で情報資源を管理する図書館部門またはアーカイブズ部門の現状、課題について報告している。本書は、１章「ミュージアム・ライブラリの原理と課題―竹橋の近代美術館で学んだ５つの命題から」、２章「ミュージアム・ライブラリ」、３章「ミュージアム・アーカイブズ」、４章「ドキュマンタシオン―作品の歴史情報とその資料の集成」、５章「ミュージアムの中の情報連携」の５章とコラムで構成されている。

1――博物館とは「歴史や科学博物館をはじめ、美術館、動物園、水族館などを含む多種多様な施設」を含む。文化庁HP「1.博物館の概要」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/gaiyo/（2023年９月24日最終確認）。

2――水嶋英治・田窪直規編著『ミュージアムの情報資源と目録・カタログ』博物館情報学シリーズ１、樹村房、2017年、10頁。

2　各章の内容

1章　ミュージアム・ライブラリの原理と課題—竹橋の近代美術館で学んだ5つの命題から（水谷長志）

美術館では、所蔵する美術作品を中心に、図書、雑誌、展覧会カタログといった文献資料や作家の書簡、日記、スケッチ帖、作品の売買や契約記録などの文書資料を扱う。これらの資料群は美術館の調査研究や展示事業を支える重要な要素であるが、その扱いにおいて専門的な人材や方法が不足しているという課題があった[3)]。しかし、1980年代後半以降、新たな美術館活動の一環として美術図書館の設置が進む動きがみられるようになった。1章では、日本の美術館に公開の「ミュージアム・ライブラリ」が設置されることが稀有な時代から美術図書館に勤務していた水谷氏が、欧米のライブラリアンから学んだ原理や課題を日本のミュージアム・ライブラリの命題としてとらえ、紹介している。

第一の命題は「つながること」である。1968年、イースト・アングリア大学図書館の副館長であったトレバー・ファウセット（Trevor Fawcett）は、美術専門の図書館で働く図書館員の「互恵的協力」の重要性を訴えた。ファウセットのこの訴えをきっかけに、英国で1969年にARLIS（Art Libraries Society）が設立され、欧米、そして日本においてもミュージアム・ライブラリの協力体制の基盤が築かれた。

第二の命題は「多様性」である。ファウセットは、美術図書館員の職務の難しさは、扱う主題領域の広範さと多種多様なメディアであると指摘した。

第三の命題は「一人図書館員の悩みと矜持」である。美術図書館員は、利用者に知識と情報を提供する喜びを感じている一方で、一人図書館員としての悩みや孤独も感じている。美術図書館員であるジェーン・ライト（Jane Wright）が吐露した自身の心情は、現代にも通じるものであるとして紹介されている。

第四の命題は「なぜ、ARLIS/Japanではなかったのか？」である。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館のヤン・ファン・デル・ワテレン（Jan van der Wateren）は、1989年に日本で美術図書館の職能団体が設置された時、「ライブラリ」の語を排除した「アート・ドキュメンテーション研究会」[4)]を設立したことに賛同を示した。アート・ドキュメンテーション研究会は、美術作品以外の文献資料や文書資料の情報を流通させるための領域横断的な活動を行っており、水谷氏は結果的にMLA連携を実践することとなったと評価する。

第五の命題は「部分と全体：あるいは分担／分散と集中」である。ニューヨーク近代美

3——水谷長志編著『MLA連携の現状・課題・将来』勉誠出版、2010年、35頁。

4——2005年、「アート・ドキュメンテーション学会」に改称。アート・ドキュメンテーション学会HP「趣旨」http://www.jads.org/guide/guide.html（2023年９月24日最終確認）。なお、「ドキュメンテーション」という語は、図書館情報学では「対象を構造化して、一定のパターンで記録し、その記録を系統的に蓄積する活動」（S.A.ホルム、田窪直規監訳『博物館ドキュメンテーション入門』勁草書房、1997年、解説viii頁）、「旧来の図書館という枠にとらわれない情報の流通（を促進する）活動」（水嶋英治・田窪直規編著『ミュージアムの情報資源と目録・カタログ』博物館情報学シリーズ１、樹村房、2017年、50〜51頁）を意味する。

術館のクライブ・フィルポット（Clive Phillpot）が著した「国立美術図書館：モノリス or アルテル」という論考では、美術図書館が連携して集まることで初めてナショナル・アート・ライブラリとなるという観点が提起されており、これは日本のミュージアム・ライブラリを考えるうえで重要な示唆を与えていると解説されている。

2章 ミュージアム・ライブラリ（長名大地）

２章では、東京国立近代美術館「アートライブラリ」の事例を通して、ミュージアム・ライブラリで扱われる情報資源の特性や収集、組織化の方法について述べられている。東京国立近代美術館は独立行政法人国立美術館の一機関であり、同法人の他機関と協働して情報資源のオープン化を進めている。

アートライブラリでは、図書約15万冊、雑誌約５千タイトルを主に所蔵している。このうち、美術館にとって特に重要な資料は、展覧会の研究成果を収録した展覧会カタログである。これらは通常、書店では流通しないため、他館との交換事業を通じて展覧会カタログを収集している。さらに展覧会情報を可能な限り網羅するため、画廊で開催された展覧会の小冊子やリーフレットも収集している。このほか美術館における重要な資料として、作家ファイルが挙げられる。これは、展覧会で作成された案内葉書やチラシ、新聞の切り抜きなどのエフェメラを作家ごとに整理し、フォルダで保管したものである。これにより、通常は残らないパフォーマンスアートの活動記録も保存される可能性があると述べる。

また、アートライブラリではアーカイブズも所蔵している。美術館の活動に伴い自然発生的に生まれる資料群を組織レコード、コレクションとしてのまとまりを維持している資料群を特別コレクションとして定義している。

アートライブラリは、国立情報学研究所（NII）が提供している書誌ユーティリティ、NACSIS-CATに参加してきた[5]。CiNiiなどのデータベースに接続することで、アートライブラリの情報資源へのアクセス性が向上する見込みがあるという。展覧会カタログは、書店等で流通しない灰色文献であり、書誌が作成されない問題を抱えているが、新規で年間約３千冊の書誌をデータベースに登録しており、研究資源の存在を開示する仕組みにつながっていると解説している。

蔵書検索はOPACで管理・運用されている。画面上では、アートライブラリの所蔵情報だけでなく、大学図書館や国立国会図書館、美術図書館連絡会などと連携し、他館の情報を横断的に検索する仕組みとなっている。この蔵書検索システムには、作家ファイルがフォルダ単位で登録されている。美術館には様々なエフェメラが集まるが、これらの資料は煩雑で整理が難しい。国立美術館における作家ファイルの分類「請求記号AF」は、全国のミュージアム・ライブラリの参考となるものとして紹介されている。

5――2022年３月より、図書館システムは、株式会社シー・エム・エスの「E-CatsLibrary」を使用している。本書、80頁。

3章　ミュージアム・アーカイブズ（松山ひとみ）

３章では、大阪中之島美術館「アーカイブズ情報室」を事例に、ミュージアムが管理する情報資源にアーカイブズ学の方法論を適用し、編成からアクセス提供に至るプロセスについて報告している。

日本の美術館関係者がアーカイブズについて十分に理解していないという現状を踏まえ、本章では「アーカイブズ」の定義に焦点を当てて説明している。初めに、ICA（国際公文書館会議）による定義を紹介し、その後、SAA（アメリカ・アーキビスト協会）のミュージアム・アーカイブズのガイドラインを引用し、ミュージアム・アーカイブズについて詳しく解説する。さらに、アーカイブズは、出所原則にもとづき「機関アーカイブ」と「収集アーカイブ」[6]の二つに大別されることを、美術館の管理対象記録を参照しながら具体的に説明する。

松山氏は、アーカイブズ学の視点から日本の美術館をみると、機関アーカイブへの理解不足により、行政職員である美術館事務員と研究者である学芸員が管理する業務文書の取り扱いに問題を生じさせていると分析する。さらに、この問題を解決するためにレコード・マネジメントの必要性を説いている。他方、収集アーカイブの現状に関して、美術作品ではない手稿や文書などの作家関連資料の登録に不備がある背景には、美術作品の審査手続きが影響していることを指摘する。作家関連資料を美術作品とは別に捉え、収集アーカイブとして迅速に情報資源化することを提起している。

次に、日本で唯一のミュージアム・アーカイブズの実践例として、SAAミュージアム・アーカイブズ分科会のガイドライン等を参考にした大阪中之島美術館の取り組みが紹介されている。まず、ミュージアム・アーカイブズの活動方針となる規程等の策定が重要であると言及し、評価・選別では属人化しない基準を作成する必要性を述べる。アーカイブズの処理においては、アーカイブズの三原則に基づいた整理、国際標準に従ったアーカイブズ記述、編成計画の作成、長期保存を視野に入れたリハウジングや媒体変換等の実施状況を報告している。

情報管理には、アーカイブズの階層記述を標準化した「ArchivesSpace」を採用しており、オープンソースソフトウェアならではの有用性について述べる。ただし、アーカイブズに特化した横断検索の実施は、日本ではまだ難しい状況であるとも指摘している。

最後に、デジタル時代のアーカイブズ普及に不可欠なアーキビストの技能について解説している。電子記録や情報技術の処理に関連する資格や講座を紹介した上で、アーキビストは情報専門職としての役割と需要を拡大していかねばならないとまとめる。

6――本文の表記にならって「アーカイブ」（単数形）と表記。本書、119頁。３章におけるアーカイブ／アーカイブズの使い分けについては、本書110、111頁で説明されている。

4章　ドキュマンタシオン―作品の歴史情報とその資料の集成（黒沢美子）

４章では、２章と３章でも触れられている「作家ファイル」や「アーティスト・ファイル」に類似した、美術館が独自に展開する情報収集活動について解説されている。事例として、フランスの美術館で行われている専門業務ドキュマンタシオンが取り上げられるが、これはミュージアム・ライブラリやミュージアム・アーカイブの理論とは異なるものであるという。

「サントル・ド・ドキュマンタシオン（Centre de Documentation）」（以下、ドキュマンタシオン）は、フランスの美術館における所蔵作品の歴史情報とその資料の収集に関わる部署のことを指す。この部署の業務は専門職員の「ドキュマンタリスト（Documentaliste）」が担当している[7)]。ドキュマンタシオンでは、作品１点ごと、あるいは作家ごとに、作品台帳や購入時の文献、文書、あるいは印刷物に紹介された図版、展覧会に貸し出した際の記録、展覧会カタログの当該部分コピー、作品関連論文の抜き刷りなどをファイリングする。美術館で所蔵される作品の歴史情報は、その作品の来歴・展示歴・文献歴等の歴史的経緯と作品の移動･貸出･状態等の管理記録の２つに大きく分けることができるが、ドキュマンタシオンでは主に前者が扱われると解説する。このファイルは日々の業務の中で利用され、中身が追加される現用資料であることから、レコード・マネジメントの業務領域にある。

黒沢氏は、作品の来歴・展示歴・文献歴を組織的に体系化することが、日本の美術館に寄与すると考えている。その理由として、ドキュマンタシオンは美術史学にもとづく文献調査とファイリングというアナログな手法を基盤とした活動であるが、この活動こそが世界に発信すべき情報資源の根拠を支えるものであると主張する。

この章ではまた、フランスのオルセー美術館およびオランジュリー美術館の業務実態や職員配置、さらには日本の国立西洋美術館およびアーティゾン美術館の業務実態や職員配置にも触れ、日本の美術館における課題についても述べる。

5章　ミュージアムの中の情報連携（水谷長志、山﨑美和、小野美香、阿児雄之）

５章は、1872年開館した、日本の博物館の中で最も長い歴史を持つ東京国立博物館を事例に、４人の著者がミュージアムの情報連携について述べるものである。

この章の冒頭では、水谷氏が、MLA連携は「AM（L＋A）」すなわち「Art Museum（Library＋Archives）」から始まると説明している。ミュージアムの作品がライブラリやアーカイブズと関係することを「内なるトライアングル」と捉え、「AM（L＋A）」は、社会が作品と作家を受け入れる受容史の現場となっていると指摘する。水谷氏はこのことを「作品の『生命誌』を編む」と表現し、ミュージアム内の情報連携の重要性を強調している。

7―― フランス以外の欧米諸国における同業務は、「オブジェクト・ファイル（Object file）」や「キュラトリアル・ファイル（Curatorial file）」と呼ばれ、管理担当者は「ドキュメンテーション・スタッフ（Documentation staff）」等と呼ばれているという。本書、187頁。

次に山﨑氏が、東京国立博物館の「資料館」における情報連携について紹介する。資料館は、創設以来収集してきた図書約27万件、雑誌約７千タイトル、写真41万件（デジタル画像を含む）を主に所蔵する図書館部門である。資料館が実施する組織内連携として、特別展への資料提供、資料収集、レファレンス、資料の保存を挙げる。特に多く頁が割かれているレファレンスについて紹介する。資料館では、所蔵品、展覧会、蔵書の来歴に関する質問などに対して、各部署のデータベースで入力されている所蔵品情報や文献情報の紐づけを行っており、この情報共有は重要なレファレンス・ツールとなっている。しかしその運用は属人的であり、情報更新の遅れなどの課題を指摘している。

次に、小野氏が東京国立博物館の「百五十年史編纂室」における活動と情報連携について紹介する。百五十年史編纂室では、編纂事業を進める一方で、機関アーカイブズとしての役割も担っている。ここで所蔵される資料は、「館史資料」として登録されている公文書、過去の年史編纂業務で用いられた文献資料や原稿類、百五十年史編纂のために収集された業務文書、さらには創設以来撮影されてきた記録写真などが含まれる。資料館が実施する組織内連携として、博物館業務と学術研究の連携について紹介し、館史資料をデジタル化して館内で共有し、各部署の業務と調査研究支援を実施していることが述べられている。

最後に、阿児氏は、収蔵品情報管理の仕組み、内部連携と外部連携について説明している。同館の「資料・コレクション情報」は、CIDOC-CRMの国際標準を参照した34項目の記述で構成されている。このモデルを管理するために「protoB」というシステムを内部開発し、運用することで、作品情報の包括的な管理と、学芸業務の効率向上が実現したと述べる。また、「ColBase」の公開によって、４つの国立博物館の所蔵品が一括検索・閲覧できるようになった。すべての所蔵品情報は統一されたメタデータフォーマットで揃えられており、NDLサーチや文化遺産オンライン、ジャパンサーチとのシステム連携が可能である。これにより、ColBaseはMLA連携の重要な結節点となったと述べる。

しかし、阿児氏は、東京国立博物館の情報資源の流通が不十分であると言及し、その効率的な流通と活用の重要性を強く指摘する。

3　所感

本書を通じて、異なる館種のミュージアムで管理される情報資源の全容が明らかになったことは非常に有益である。これにより、情報資源のデータを標準化し、流通させるプロセスが明確になり、ミュージアムにおける情報資源共有化の現状が理解しやすくなった。

特に２章では「特別コレクション」、４章では「作家関係資料」と呼ばれている収集アーカイブズに該当する資料群の取り扱いについては、従来の美術館業務では見過ごされがちな情報の重要性が強調され、その活用の可能性が示された点は評価できる。大阪中之島美術館の管理データベース「ArchivesSpace」の導入は、一点対応型の図書館システムに対して、資料群情報をどのように入力し、流通させるのかという点で参考になる実例である。このような取り組みを通じて、ミュージアムの情報資源をより効果的に活用していく道が

開かれるのではないかと感じた。

博物館情報学シリーズの第１巻１章では、本シリーズの序説として、博物館情報として４種の情報―「(1) 資料コレクション情報」「(2) 運営・活動情報」「(3) 経営・財政・人事等のマネジメント情報」「(4) ネットワーク情報資源」[8]を定義している。しかし、本書を通じて、「(2) 運営・活動情報」および「(3) 経営・財政・人事等のマネジメント情報」に関する記述が少ない印象が残る。これらの情報はアーカイブズ学では機関アーカイブズに該当するものであり、３章で松山氏もこの点を指摘しているが、機関アーカイブズは組織の透明化につながる記録であるにもかかわらず重視されていない。特に、国公立のミュージアムでは、組織記録の公開が公文書管理法との関連から見ても重要である。例えば独立行政法人国立美術館の場合、独立行政法人としてのその法人文書はレコード・マネジメントの範疇にあり原課で管理されているが、ほとんどの文書の保存期間満了時における措置は「廃棄」とされており、文書が「アーカイブズ」として公開される予定がないことから[9]、今後の課題として考えられるべきである。

２章では「作家ファイル」、３章では「アーティスト・ファイル」と称される美術館独自の情報資料は、美術館活動において重要な役割を果たしていることが理解できた。このファイルは収蔵されている作家の最新情報を更新し続けるもので、美術館活動においては現用文書として扱われている。しかしながら、これらの資料を公開する際の公開基準に関する説明が不足しているように感じた。また、「作家ファイル」および「アーテイスト・ファイル」には、収蔵作家に関する新聞の切り抜きや文献コピー、作品の写真などが含まれると考えられる。これらの利用における著作権や関連する権利の問題は、美術館における情報管理の重要な課題である。これらの権利問題に対する具体的な対応策やガイドラインに関する解説も必要であると考える。

最後に、本書で報告された各館の取り組みは、今後、日本のミュージアムにおける情報資源連携のモデルとなっていくと考えられる。本書はミュージアムにおける情報資源の現状と問題、そして解決の手がかりを明示しており、多大な収穫をもたらすものであった。

8――博物館ネットワーク情報資源とは、個々の館がネット上で公開・提供する情報群の中から、情報検索者がキーワードを入力することによって得られる情報の総体のこと。水嶋英治・田窪直規編著『ミュージアムの情報資源と目録・カタログ』博物館情報学シリーズ１、樹村房、2017年、21頁。

9――国立美術館の法人文書ファイル管理簿には、新型コロナウイルス関連の文書についてのみ、「移管」と記載されている。独立行政法人国立美術館HP「法人文書の公開」https://www.artmuseums.go.jp/corporate_info/rule/houjin_koukai（2024年２月16日最終確認）。